
神様の翼が舞う日

剣一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の翼が舞う日

【Nコード】

N2708D

【作者名】

剣一

【あらすじ】

神様の翼が舞う日、僕は彼女といた。しかし僕はクリスマスに彼女の温もりを放してしまった。そして再びクリスマスが近付くある日”俺”はある少女と出会った。彼女の温もりを忘れられぬ俺の心に今年も神様の翼は舞うのか……

プロローグ（前書き）

こんばんは

今回はクリスマスに完結する物語です。その為、他の小説がなかなか執筆する事が出来ませんでした。読者の皆様、本当にすいません。しかし、この小説も一生懸命に執筆したので良ければ読んでいって下さい。

今回はちょっと独特の形を取ろうかと思っています。

今まで実際の時期と小説内の時期を気にしていませんでしたが、今回は出来る限り時期を考えました。

そして、今日からクリスマスまで毎日20時〜0時の間に投稿します。

そして、今回はプロローグの前書きと最終話の後書きのみ作者の言葉を書こうと思います。

長々とすいませんでした。

では、本編の始まりです。

プロローグ

その日は雪がしんしんと降っていた。

クリスマスが目前に迫っていた。活気付いている街に住む僕の家へと向かう近道の公園の中で僕は1人の女性とベンチに座り話していた。

当然寒いはずだった。

僕の左手に握られている殆ど中身の無い缶コーヒーは冷え切っていた。しかし、僕の右手にある手はとても柔らかくそして温かくて、僕の右手を優しく握ってくれていた。

「知ってる？」

雪ってね、神様の翼なの：神様が持ってた物だから真っ白で汚れてないの。」

急に彼女が呟いた。

僕は一呼吸置き、頭に浮かんだ疑問を彼女に呟いた。

「じゃあ何で冷たいんだよ？」

「それはね：冷たいのは神様の心があつたかいから。心の温かい人は手が冷たいのは知ってる？」

神様も心がとても温かいから、翼は冷たいの。」

「ふーん、でも雪って冬しか振らないじゃん、神様の翼は冬しかないって事なの？」

「冬って何であるか知ってる？」

僕の言葉に彼女はフフと笑いながら答えた。

彼女のその笑みは昔から沢山の人々を惹きつける優しい、魅力的な笑みだった。

物心つく頃から彼女の変わらない笑みを見続けてきた僕はいつの間にか彼女の笑顔に惹きつけられていた。

勿論、彼女の笑みに惹きつけられたのは僕だけではなかった。

そして僕自身も彼女にとっては特別な存在ではなく、彼女の笑みに惹かれたその他の沢山の人々と同じだと思っていた。

しかし僕はその他の沢山の人々と違った点が一つだけあった。

それは、彼女が僕をその他大勢の中の一人としてではなく、彼女の大切な一人として選んでくれた事だった。

「僕の質問無視かよ…」

「いいから、答えてよ。」

「んー…まあ…自然の摂理だから？」

「つまらない答えね…」

彼女の質問に対して、いつも現実的な答えを返す僕は答える度に苦笑いされながらそう言われた。

「はいはい、僕はつまらない男ですよ。」

「ん、もうそんな事言ってないじゃない。」

で、話を戻すけど、冬は誰かの温もりを求める季節なのよ。それが家族だったり、友人だったり、恋人だったり…

誰もが大切な人の温かさがほしくなる季節なの…

今、私があなたの温もりを求めて、あなたの傍に私がいるようにね。

「

彼女が悪戯っぽく僕に微笑んだ。

僕が少し手を握ると、ここにいる事を教えてくれるように僕の右手をそっと握り返してくれた。

「で、それと神様の翼との関係は？」

「神様の姿を人は見る事できないじゃない。たまに人の姿でいて、見る事も出来るけど、基本的には神様は人に自分の存在を分からせる事が出来ないの。」

「それで？」

全く話が掴めない。彼女の話はいつもこうだ。

「だから、冬に…温もりがほしくなる季節に、神様は自分の冷えた翼を落とす事で、自分の存在を…自分はここにいて事をみんな

に知って貰おうとするの。」

神様の翼が僕らの世界を舞う日

彼女の隣

冷たいベンチ

君は微笑んでいた

それから数日後

その日も翼は舞っていた

クリスマス

近くにいたのに遠く感じ

隣にいるのに離れていくように感じ

彼女の温もりに気付かずに自分から遠く離れ

僕と彼女は別の道を進み始めた

第一話―初雪―

いつもの街中はクリスマスが近付き、さらに明るく、賑やかになっていた。

毎年毎年、ご苦労様だ。

「ふう…」

悴む手を上着のポケットへとねじ込む。

冬の空気は家へと急ぐ俺をどんどん凍えさせていった。

「もうクリスマスか…あれから…何年…」

足下ばかり見ていた俺はふと立ち止まり、辺りを見渡す。しかし、俺の目に映る光の数々は白黒のつまらない物にしか見えなかった。俺の世界に色を灯してくれる存在はいなかった。

「俺には…関係ない事だ…」

俺は止めていた足を再び動かし始めた。

家への近道である公園を通る時、一段と冷え切った風が俺を撫でていった。むしろ切り裂いていった方が適切かもしれない。

俺はマフラーにさらに顔を埋めながら、歩くスピードを上げた。

「ん?…雪?…」

その時、俺の目の前にゆっくり、ゆっくりと白い物が舞い落ちてきた。

俺はあまり考えずに、ずっと手を伸ばした。

雪が降ってもおかしくない程にまで冷えた夜空の下、俺の手の上に乗ったのは雪ではなく一枚の真っ白な羽根だった。

「羽根?」

俺は目線を夜空へと上げた。そこには俺がいるかと思った鳥の姿はなく、大きな丸い月が俺を見下ろしているだけだった。

再び強く吹いた冷気が俺の体を包み込む。

「うっ…」

俺は上を見上げるのをやめ、正面を見た。

俺の目に飛び込んできたのは鳥でもなく、人間でもない、背中に大きな真っ白い翼を持つ少女だった。

その姿は俺に天使を思わせた。

俺は全く言葉を出す事ができなかった。ただ目の前にいる少女の美しい姿に心奪われていた。

その時今までうなだれていた少女が顔をゆっくりと上げた。そしてその目線の先に俺を捉えた。

俺は今の状況を全く理解する事ができなかった。

俺の口が動いているのは分かるが、それが言葉を発しているのか、それとも呼吸をしているのかさえ分からなかった。

——白い翼を持つ少女——

その少女は何も話さずにまるでやつと歩く事ができた赤子のように不安定な足取りで、しかし地面の感触を確かめるようにしっかりと一歩一歩踏み出し、俺へと近付いてきた。

「えっ!？」

動揺していた俺は二、三步下がっていた。しかし少女は俺の手を伸ばせば触れる事ができる程に迫っていた。

少女の背中の翼が急に消え始めた。むしろ少女の背中に収まっていた。

翼全てが消えると少女は眠りにつくように緩やかに目を閉じ、そのまま俺の方へと倒れ込んできた。

「だ、大丈夫ですか？」

俺は慌てて手を伸ばし両手でしっかりと受け止めた。

俺へと倒れ込んできた少女はそんな俺の慌て具合を知らずに寝息をスースーと立てていた。

「どうすればいいんだよ…」

俺の呟きに答えてくれる人は周りに誰一人としていなかった。

「はあ…」

俺はキヨロキヨロと周りを見渡すが、こんな寒い日の夜の公園には人っ子一人いなかった。

とりあえずベンチに寝かしといてあげる考えも浮かんだが、さすがにこの寒さである。置いててもしもの事があつたらと考えるとそれはできなかった。

結局、俺はその場で何とか少女を背負うと歩き始めた。幸いにこの公園から俺の家へはそんなに遠くない。

「下心はねーぞっと。」

自分自身で確認するように、俺はぼそりと呟いた。

少女を落とさないように鍵を開けてやっとなんか俺は我が家に帰ってきた。

とりあえず少女をベッドに横にさせる。

「よいしょ…」

気持ち良さそうに眠る少女の寝顔はどこにでもいそうな可愛い少女の物にしか見えなかった。

「さて…とりあえずどうすりゃいいんだ…」

先程から何度も考えていた事を改めて言葉に出してみた。しかし、言葉に出したからと言ってすぐに答えが見つかる訳はなく、少女の規則正しい寝息によって俺の言葉は溶かされていった。

「だいたいあれは何だって言うんだよ…」

改めて少女の翼を思い出しながら俺は風呂場へ向かった。

「まさか危ない奴じゃないよな…」

シャワーを捻りながら、ふと考えてみるが、どう考えても危ない奴にしか見えない。だからと言って、もうここまで連れて来てしまつてはどうしようもない。

半ば諦めた俺は深い溜め息を付いたが、その音はシャワーによってかき消された。

冷え切った体に熱いシャワーは少し痛かった。

少し考えてみたがやはり名案は浮かびはしなかった。

俺は風呂場から上がると、体を拭きながら、洗濯機に先程まで着いた洋服をちゃんとネットに入れて突っ込んでいった。

「うゝーさみー」

俺は着替えると、押し入れにしまっていた敷き布団と掛け布団を引っ張り出して床に寝ころんだ。

いつものようにすぐに眠気はやって来て、俺を微睡みの世界へと連れて行った。

すぐそこでは見ず知らずで会話もしていない上に、変な翼のある明らかに怪しい少女がいるって言うのに、俺の中に不安はなかった。カーテンの端から月灯りが静かに伸びていた。

第二話―細雪―

ジリリリリ

「うーん…」

眠い目を擦りながら俺はゆっくりと体を起こす。

「あれ…？俺何で床で寝てんだ…？」

まだぼーっとした頭が徐々に回復していき、昨日の夜の光景が思い浮かび始めた。

「あっ！」

完全に覚醒した俺はベッドに目をやった。しかし、そこには寝ているはずの少女の姿はなく、綺麗に整理されたベッドしかなかった。

「あっ起きたんですかー」

高めのほんわかとした声が俺へと投げかけられた。

俺が声のする方へ目をやると、昨日の少女が朝食を準備していた。

「おはようございます。」

「お、おはよう。」

「朝ご飯出来てますよ。一緒に食べましょーよ。」

「あっ…うん…」

俺はいつもご飯を食べる小さな折り畳み式のテーブルを引っ張り出した。少女はそこにパンが一枚ずつ乗つけられた皿とレタスが盛り付けられたサラダ、そしてホットコーヒーと砂糖を俺の前に、ホットミルクを少女自身の前に置いた。

「いただきますー」

「い…いただきます…」

俺は今更ながら完全に少女のペースに乗せられている事に気付いた。俺が戸惑ってパンに手を伸ばさないと、少女がパンを口の前で止め、上目遣いで尋ねてきた。

「味…ダメ…でした？」

そんな顔されたら何も言えなくなっちゃうじゃないか…

俺は質問への解答を後回しにし、今は少女が作った朝食を食べる事にした。

パンを口に運びながら少女を盗み見る。少女はパンを小動物のように少しでも口に含み、ゆっくりと咀嚼してから飲み込んでいた。

「ふーふー」

（ちくしょう：普通の可愛い女の子にしか見えねー）

俺はパンを皿に置いて、言葉を選びながら話しかけた。

「あ…のさ…」

「はい？」

まだミルクの熱を息で冷ましている少女がこっちを向いた。

「えと…き、君は何なの…？」

「私ですかー？んー」

少女は一口ミルクを啜った。

「答えなきゃ：ダメですか？」

「昨日の夜あんなんも見せられちゃ…こっちだって正直不安だよ…」

「えーと…私は…その…」

少女が答えにくい事だが、それでも俺に伝えようと言葉を考えているのが手に取るように分かる。そんな姿を見ると、なかなか強く言えなくなってきた。

「あのですね…私は…その…」

「あゝもう良いよ…その代わり俺が今から聞く質問に答えてくれ。」

「えっあつひゃい！」

（囁むな…）

「まずは正直、昨日の光景を見たから聞く。失礼かもしれないが君は危なくないか？」

「は、はいっ！」

少女はすぐさま真顔で答えた。

「あゝじゃあ出て行く宛はある？」

後、君という俺は面倒な事に巻き込まれないか？」

「その事なんですが…その…私に出来る事なら何でもするんで…それに面倒は起こしません。」

その言葉を聞き、俺は半ばヤケになってしまった。

「はぁ…もういいよ、ここにいて…自分の家みたいに思っているよ。」

正直、なぜ自分自身がこんな事を言ってしまったのか分からない。俺は一呼吸置いた時、少女はいきなり泣き始めてしまった。

「えっ!? な、な、何か悪い事言っちゃった!? ご、ごめん。」

俺の慌てぶりを見て、少女はプツと笑った。

「嬉しかったんです。」
濡れた瞳が俺の目を見る。

この時、俺とよく分からないけど可愛い少女との同棲生活が始まった。

「今日は俺用事ないから買い物行くぞ。日用品買わなきゃならないしな…大丈夫だよな?」

洗った顔をバスタオルで拭きながら、朝食の後片付けをしてくるている少女へ向かって話しかけた。

この少女は自分から朝食の後片付けをしてくれていたのだ。

「はいー楽しみにしてますー」

少女は本当に楽しみにしているのかとてもニコニコとしていた。

俺は少女がまだ皿洗いをしているのを確認して、さっさと着替え、行く準備を整えた。

俺は棚に置いてある写真立てがちゃんと立てかけてある事に気付いた。

その中からはまだ若い青年と短髪の少女が俺へと満面の笑みを向けていた。

大方、少女が倒れていたのを直したのだろう。しかし、少女は勘違いをしていた。その写真立ては倒れていたのではなく、倒していた

のだ。

パタッ

俺は写真立てを寝かせると、少女の方へと声をかけた。

「よしっ行けるか？」

「はいー」

「それじゃ寒いだろ。これ着とけ。」

俺はハンガーにかかっている俺のジャンパーを少女に渡した。

「ありがと…」

俺もコートを羽織ると少女を連れ、冬の冷えた外に繰り出した。

俺達はまず最初の洋服屋に到着した。

「あんま高いのは買うなよ。」

「はい。」

その笑顔が恐怖に感じる…

それから数時間後、俺達は遅めの昼食の Pasta を食べていた。

ちなみに少女はきのこのクリームスパゲティ、俺はカルボナーラを選んでいた。

「今日はありがとうございました。」

「いや、大丈夫。」

俺はそう言いながら俺の隣の席に置いた荷物に目をやった。

結構な量を買ったのだけれども、これは半ば俺が買わせたみたいなものだった。なぜかと言うと、少女は遠慮のしすぎで、逆に俺が困るほど買わなかったからだ。

あそこまで遠慮されると、そこまで俺に金がないように見えていたのかと正直泣きたくなってしまう。

「ほーんとにありがとうございました。」

「別に大丈夫だって。あんま高いのは買うなって言ったのも、もっと高いのばっか見るかと思ったからだしな。」

昔も似たような光景があったな…

あの時は…

ゆっくりと俺の中に昔の記憶が蘇り始めた。しかし俺は全てを思い出すのを止めた。

俺は俺の中に浮かび始めた思考を無理矢理押さえ込み、少女に目をやった。

「なあ…」

「はい？」

「名前…聞いてないよな、何て言うの？」

「んとー雪ー」

今さっき押し込めたはずの記憶が俺の中で暴れ始めた。

この少女は俺の心を壊そうとしているのだろうか。しかし、その事実には気付いていない少女には俺からどうする事もできない。

ただ打ち明ければいいのかもしれないが、やはり俺は言うことが出来なかった。

「あのー大丈夫ですか？」

気が付くと少女はじっと俺を見つめていた。

「あ、ああ…ごめん。雪ちゃん。」

「雪でいいですよー」

「分かった。そう言えば今年寒いのに雪降らないな。」

窓の外では寒さに耐えかね、首を竦めていたりしている人や互いに温もりを求めあっているカップルなどばかりだった。

「雪は…好きですか？…」

急に雪が神妙な顔付きで俺へと話し掛けてきた。

「聞いた話なんだがな…」

俺はその質問には答えずに呟いた。

「知ってる？」

雪ってね、神様の翼なの…神様が持ってた物だから真っ白で汚れてないのー

ーじゃあ何で冷たいんだよ？ー

―それはね…冷たいのは神様の心があつたかいから。

心の温かい人は手が冷たいのは知ってる？

神様も心がとても温かいから、翼は冷たいの―

―ふくん、でも雪って冬しか振らないじゃん、神様の翼は冬しかないって事なの？―

―冬って何であるか知ってる？―

―僕の質問無視かよ―

―いいから、答えてよ―

―ん…まあ…自然の摂理だから？―

―つまらない答えね―

―はいはい、僕はつまらない男ですよ―

―ん、もうそんな事言っていないじゃない。

で、話を戻すけど、冬は誰かの温もりを求める季節なのよ。それが家族だったり、友人だったり、恋人だったり…

誰もが大切な人の温かさがほしくなる季節なの…

今、私があなたの温もりを求めて、あなたの傍に私がいるようにね―

―で、それと神様の翼との関係は？―

―神様の姿を人は見る事できないじゃない。たまに人の姿でいて、見る事も出来るけど、基本的には神様は人に自分の存在を分からせる事が出来ないの―

―それで？―

―だから、冬に…温もりがほしくなる季節に、神様は自分の冷えた翼を落とす事で、自分の存在を…自分はここにいて事をみんなに知って貰おうとするの―

「雪って…神様の翼らしいんだ…だからそんな神様の物である雪を嫌いになる事は出来ないよ。」

雪はじーっと俺を見つめていた。

「じゃあ、そろそろ行くか。」

恥ずかしくなった俺は荷物と伝票を持つと、レジへとそそくさと進

んだ。

後ろからは雪が俺に待つことを促すような言葉を何か言っていたのが聞こえたので、俺はレジの近くで立ち止まり一人呟いた。

「神様の翼…か…」

ガチャツ

俺はドアノブを回し、家に入った。

昨日と違うのは後ろにいる雪は自分の足で立っていて、なぜかもう雪に対する恐怖心がない点だろう。

「ふー着いたー」

「お邪魔します。」

「なあ…雪…」

「はい？」

「お邪魔しますじゃなくていいよ…いちいち他人行儀だと雪も俺も疲れちゃう。」

俺は靴を脱ぎながらぼそりとそう言った。この時雪がどんな顔をしているのか分からなかったが

「はいっ」と答えた雪の言い方は俺に雪が笑っているだろう事を安易に想像させた。

「雪…おかえり。」

靴を脱ぎ終え、廊下に立った俺は雪の方を振り返り、鼻を掻きながら呟いた。

雪は俺の言葉を聞いた後、喜びと照れが一緒くたになったような顔で笑顔を作って

「ただいま」と答えた。

俺はドサツと荷物をベッドの近くに下ろした。

俺は帰りに買って来た食材でそのまま夕食の準備をしようと台所へと向かった。

ちらりと雪を見ると、俺が荷物を置いた辺りに一緒に雪が持ってい

た荷物を置いていた。

（まあ色々買ったんだ。確認とかあるだろうし、ほっとくか…）

俺が袋と冷蔵庫からいくつか食材を取り出していると、いつの間にか後ろに雪が立っていた。

「手伝いますー」

「別にいいよ。買った物でも見てろよ。」

俺の言葉に雪は口を尖らせながら反論した。

「大丈夫ですー手伝わせて下さい。」

「分かったよ…じゃあ、手伝ってもらっていいか？」

俺がそう言った瞬間雪の顔が見る見る満面の笑みに変わっていった。

「はいっ」

（こんな風に隣に誰かがいる料理は久々だな…）

俺は包丁をなかなか器用に扱っている雪の横顔を盗み見た。その横顔に一瞬別の顔が浮かんで、ここにいるはずのない横顔が見えた。

「ご馳走様。」

「ごちそうさまでしたー」

俺達二人の前には具が結構残ってしまった鍋が置いてあった。

「ちょっと作り過ぎたな…」

「明日おじやにでもして食べましょーよ。」

「良い考えだ…そうしよう。」

「はいっ」

（こいつはいつもニコニコしてるな…）

俺は鍋を持ち立ち上がった。

それを見てすぐさま雪も立ち上がり、鍋へと手を伸ばしてきた。

「私が片付けますから、大丈夫です。」

「あー良いつて、それより雪、昨日風呂入ってないだろ？今、入って来いよ。」

俺はコップなどを洗いながら答えた。

「でもー」

「別に覗きやしないから、遠慮しないで入って来たってんだよ。」
「分かりましたー」

雪は渋々と言った様子で風呂場へと向かって行った。

「すいませーん」

何分たっただろうか、洗い物を終えてくつろいでいた俺は雪の声によって起こされた。

「ん…どした？」

「あのータオルが…」

「は？」

まだ頭が起きてないのか今一雪の言葉が理解出来ない。

「タオルどこですかー」

「あっ!!」

俺は慌ててバスタオルを取り出し、風呂場へと向かった。しかし、当然の事ながら、そこには裸の雪がいる訳で…

「きゃっ!!」

「わ、わりっ!!」

俺はバスタオルを雪へ軽く放り投げ、急いで戻った。

「ふう…」

先程の雪の姿が俺の頭に浮かんできた。俺も普通の健康な男だし当然反応してしまう物がある。しかし、それを慰める訳にもいかず、俺は他の事を考えようとしていた。

しかし、その俺の意志をさらに狂わせる事が起きた。

「ぜっーたいこっち見ないで下さいねー」

「はあ!？」

訳も分からず俺はただ雪の言われた通り雪の方を見ずに、窓の外を眺めていた。

しかし、俺は夜に明るい室内から窓を眺めるとどうなるか考えていなかった。

「うっ…」

鏡のように窓は雪の姿を映し出していた。

着替えを脱衣所へと持って行かなかったのか、バスタオルを体に巻いて俺に背を向けていた。

するりと舞ったバスタオルの下からは、何も身に纏っていない真っ白で華奢な雪の背中が見えていた。

俺は堪えきれず、目線を落とした。

少し膨らんだジーンズの股間部分が目につき、俺は一つ溜め息をついた。

「もういいですよー」

何も知らない雪の声が俺の背中へと投げかけられた。

「ああ…」

俺は苦笑いで風呂場へと向かった。

熱めのシャワーを頭から浴びると少しずつ高ぶっていた気持ちも落ち着いてきた。

「ったく…」

雪は俺を聖人君子か何かと勘違いしてるのかもしれない。俺だって女の裸などを見ればムラムラするし、”慰め”だってする。

雪はそんな男の止むを得ない状況ってやつを少し分かっていてほしい…

俺は再び溜め息をつき、風呂場を出た。

その頃には俺の意志とは無関係な物も落ち着いていた。

服を着て、濡れた頭を拭きながら脱衣場を出た俺は雪がいるベッドの方へと向かった。

今日購入したパジャマを着た雪がベッドに座って何をする訳でもなく、ぼーっとしていた。

「雪？」

「えっあっはい!？」

「いや、もう寝るか？」

「えと…何かするんですか？」

「いや、別に：じゃあ寝るか。」

俺がそう言いながらベッドの隣に布団を敷いた。俺が布団を敷き終えたのを見計らって、雪が話し掛けてきた。

「あっ今日は私が下で寝ます。」

「雪はベッドで寝て良いよ。俺が下で寝るから。」

俺はそう言い、雪に向かっておやすみ、と布団にさっさと潜り込んだ。

雪はベッドの上でぶつぶつ言っていたが、結局諦めたのか俺に

「おやすみなさい」と言ってからベッドに横になった。

先程敷いたばかりの布団の中はまだ冷たくて、少しずつ俺の体温で温まっていくのが感じられた。

「まだ：起きてますか？」

不意に雪の声が暗い部屋に浮かんた。

「どした？」

「あっ：いや：何でもありません。おやすみなさい。」

「そうだ、言い忘れてたけど、俺明日から用事あるから家にほとんどいないぞ。」

「えっそうなんですかー？」

雪は心底驚いたような声を出した。

「悪いが、そうなんだよ。って事で明日留守番しとけよ。」

俺はベッドの雪の方を向いた。雪はいつの間にか俺の方を向いていた。真っ暗な部屋の中、窓の外月明かりだけが俺達二人を照らしていた。

照らし出された雪の顔は口を少し尖らせているが笑顔だった。

「別に何しても良いからさ。な？」

「はい。」

「じゃあ、おやすみ。」

俺はそう言うとゴソゴソと雪に背中を向けた。

「はい、おやすみなさい。」

正直、あのまま雪の方を向いていたら俺の中で何かが変わってしまった

いそうだったからだ。

そして、俺はゆっくりとそのまま眠りに付いた。

第三話―雪片―

ジリリリリ

「起きて下さいー」

俺が目を開けると雪は俺を揺すっていた。

「お、おはよう。」

誰かに起こされるという行動があまりに久々で少し恥ずかしくなった俺はそそくさと顔を洗いに向かった。

そんな俺の背中に雪の言葉が投げかけられた。

「朝ご飯出来てますからねー」

「ありがと。」

雪の作った朝食は昨日の晩の鍋の残りにご飯を入れて少し煮たおじやだった。

「美味しいですか？」

「おう」

なかなか美味しいおじやを食べている俺を雪は前に座って眺めているだけだった。

「あれ？雪は食べないの？」

「あんまり美味しそうに食べてくれるから見惚れちゃいました。」

「あほな事言うなっの。」

俺は茶碗に入っているのをかき込むと、立ち上がった。

「ご馳走様。」

俺は雪の頭をクシャツと撫で、身支度を整え始めた。

「じゃあ雪俺は行ってくるけど、誰が来ても開けんなよ。」

俺は靴を履き終え、見送り、と玄関まで来てくれた雪に話し掛けた。

「はい。」

「金はこんだけあれば足りるだろ。適当にこれで飯食ってくれ。」

俺は財布からお金を取り出すと雪に渡した。

「はい。」

「後、どっか行くかもしれないから、これ家の鍵な。」

俺はさっき引き出しから持って来た予備の鍵を渡した。

「はい。」

「ちゃんと戸締まりしろよ。」

「はい。」

「分かってんのかよ…」

「はい。」

雪の気の抜けた返事に溜め息を返してから俺は家を出た。

「行って来ます。」

「行ってらっしゃーい。」

雪は玄関から半分体を出して手を振り出した。

「ばっ馬鹿！！んな事やめろっ！」

俺は慌て雪を家の中へ押し込んだ。

雪は

「えー何でー」と人差し指の先を口に加え、上目づかいで反論してきた。

（ちくしょ、可愛い顔しやがって…）

「まじであれば勘弁してくれ。」

「仕方ないですねー」

雪はまだ納得した顔ではなかったが、俺が雪の頭をクシャツと撫でると笑顔で行ってらっしゃい、と俺を送り出してくれた。

つまらない物事でも全て平等に時間は過ぎていき、気が付くともう例の公園を過ぎていた。

晩飯にカップラーメンでも食うかなとか考えながら俺は部屋まで向かい鍵を開けた。

もう寝ていると思っていたが雪は俺が帰って来たのを確認すると目を擦りながら

「おかえりー」とやって来た。

「雪、まだ起きてたのか？」

「んーご飯待ってたー」

雪は二人分用意してある夕食を指さした。

「わざわざ待たなくても良かったのに：まあありがとな。」

「うんー用意してくるから、荷物とか置いて来てー」

雪はそう言って、あくびを一つすると台所へと向かった。

俺は

「ありがと。」と答えると荷物を置き、上着を脱ぎ、ハンガーにかけてから手を洗いに向かった。

冷え切った手にぬるめのお湯は痛かったが、徐々に気持ちよくなり、俺の手に温もりが少しずつ戻ってくるような感覚だった。

俺が夕食の前に腰を下ろした時には雪パツチリと目を覚まして待っていた。

「シチューか：」

俺はなかなか美味しそうなシチューを確認して呟いた。

「さっ食べよー食べよー」

「いただきます。」

「いただきます。」

雪の作ったシチューは見た目と同様になかなかの味だった。

俺が無言で真剣に食べていると、雪が俺の事を見つめているのに気付いた。

「お、美味しいですか？」

「ん：かなり美味しいぞ。雪、料理上手だな。」

「女の子ですからー」

雪は俺に褒められて鼻高々といった様子だった。

ー女の子なんだから、料理上手は当たり前よー

ある言葉が俺の脳内に響いた。

小さな言葉の欠片

普段は忘れていたような言葉の欠片が他の言葉の一部と偶然一致し、再び俺の中で意味を手にした。

今まで受け取った言葉は無くなる訳じゃない。

自分の中に全て残っているのだが壊れたりしてしまい、言葉の欠片となるのだ。

言葉は欠片だけでは意味をなさない。しかし、他の言葉が偶然、欠けている部分を埋められたら、その言葉は再び意味を手にする。

今、俺の中で蘇った言葉のように：

「どうしましたー？」

雪が心配そうに俺を見つめていた。

「あっ：いや、何でもないよ。ちょっとぼーっとしちゃっただけだよ。」

「お口に合わなかったのかと思いましたよー」

雪はほっとしたように息をふーっと吐いた。

「いやいや、それはないよ。そう言えば今日何してた？」

雪は食事の手を止め、ゆっくり考え始めた。そして一言一言自分で確認するように話し始めた。

「えとーあれから掃除して、お昼ご飯と一緒に朝ご飯食べて、お散歩してから夜ご飯の買い物に行って、帰って来たら準備して：

で、お風呂作ったりして待ってたんですけど、さっきからずっとウトしちゃってました。」

「そっか：遅くなって悪かったな。」

俺がそう言うとき雪は笑顔で

「全然大丈夫ですよー」と言ってくれた。

「なあ雪：

「はい？」

「これから毎日こんくらいの時間だから、先に寝てていいぞ。」

「何言ってるんですかー」

「いや、今日だって朝食作るために早起きしてくれただろ？眠そう
で悪いじゃん。」

「私が勝手にやってるんだからいいんです。」

「だいたいご飯を一人で食べても美味しくないですよー」

雪は真面目な顔をして俺に反論してきた。

「はあ…まあ、雪がそう言うならそれでいいよ。でも眠かったら寝
てていいからな。」

「だーかーらー」

最後の俺の言葉に反応したのか雪が頬を膨らませながら何か言っ
てようとしたので

「はいはい、ほら飯冷めるから食べよ。」と俺が言うと、雪は渋々
といったように食べる事を再開していった。

その後、風呂に入り、少し休憩してから寝ようとしたが、そこでま
た問題が起きた。ベッドで眠る事を雪がまた遠慮しだしたのだ。

「いーからそこで寝ろ。」

「悪いですよー」

「悪いと思うならさっさと寝ろ。」

「そー言う事じゃなくてー」

俺がすつと布団に潜り込むとベッドの雪は溜め息を付き、諦めたよ
うに横になった。

「ばかー」

雪はいきなり俺に枕を投げつけてきた。俺は雪に背を向けたままの
態勢を変えずに呟いた。

「どう考えても雪の方が馬鹿だ。」

「うー」

雪は反論できずに唸っていたが、スタスタと俺の方へやって来て、
さっき枕を掴むと俺の腰を軽く蹴り、ベッドに戻った。

「おやすみ、雪。」

俺がそう呟いた言葉はそっと闇に溶け込んでいった。

「おやすみなさーい」

そう答えた雪の言葉はカーテンの隙間から照らす月明かりのように
柔らかい温かさを持っていた。

俺はその温もりを感じながらゆっくりと眠り込んでいった。

第四話―牡丹雪―

「起きてー下さいー」

誰か俺をが呼んでいる…

「んあ？」

夢の中から目覚めてきた俺はうつすらと目を開けた。俺の視界に飛び込んできたのは鼻がくつつきそうにまで近付いた雪の顔だった。

「うっうわあ！！」

余りにも雪が近くだったために驚いた俺は大声を上げてしまった。

雪は

「そんなに驚かなくても…」と少し膨れっ面をしていた。

「ち、近すぎるんだよ」

「朝ご飯出来ましたよー」

俺の話も聞かずに雪はスタスタと台所へと向かって行った。

俺も立ち上がると布団を畳んで動き始めた。

「今朝は和食だな。」

俺は朝食を見てそう呟いた。実際、目の前に並んだ料理はご飯に野菜の味噌汁、アジの干物に納豆と卵焼きと言う日本の朝食の基本と言っても過言でない物が揃っていた。

「準備出来ましたよー」

俺はやって来た雪の方に目をやった。雪は両手に湯気の立つお茶を持ってきて、一つを俺の前へと置いた。

「さあ食べましょー」

笑顔で話し掛けてくる雪に対して俺は何も反応する事が出来なかった。

「和食…だめでした…？」

雪が恐る恐ると言った様子で俺に尋ねてくる。

「雪…悪い…そのエプ…ロンは…」

何とか声を振り絞って出したもののその声は掠れていた。

「雪…エプロンは新しいのを買ってやるからそのエプロンだけは…」

俺はどんな顔をしていたのだろうか

怒りの顔だろうか

哀しみの顔だろうか

ただ

ただ

俺の心は

ただ

辛かった

何かを感じ取ったのか雪は無言でエプロンを脱ぎ、綺麗に畳むとしまいに行った。俺は震える手でお茶を手にとると一口啜った。そして呼吸を一息つくと言雪を呼んだ。

「雪ー」

「はっ、はいー!!」

トテトテと小走りにやって来た雪に向かって俺は笑顔で話し掛けた。

「冷めちまうから食べようぜ。」

「い…いただきますー」

「いただきます。」

雪の料理はとても上手いものだった。しかし今の俺には味わう余裕

などなかった。

「すいません…」

雪が急に謝ってきた。

「いや雪は悪くないよ。気にすんな。」

「でも…私が…」

「俺のせいでこんなになったけど、もうこの話はやめよう。な？」

俺は箸の動きを止め、雪を見つめた。

「はい…」

それから二人の間に気まずい空気が流れ、結局俺が家を出る時の

「行ってきます。」と

「行ってらっしゃい。」しか話せなかった。

俺は改めて心の中で自分自身の弱さを見つめ合った。

いや、見つめ合うだけではなく、再び俺は自分自身の弱さに負けたのだ。

ここまでくると弱さと言うより傷かもしれない。傷を自分で治そうとするが、完治する前に再び自分で傷口を抉り、痛みに耐える。

その繰り返し。結局、俺は昔いや、あの日から何も変わっていない。変わろうとしていない。全く成長しようとしていない

罪悪感にまみれた中でも時間はしっかりと経過していき、冬の夜は深い闇に包まれていた。

時計を確認すると昨日帰宅した時間より大分遅くなっていた。俺の脳裏に昨日の俺が帰宅した時の雪の眠たげな表情が浮かんできた。

「まだ起きてんだろーな…」

俺の脚は次第に小走りに変わっていった。

「ただいま。」

「おかえりなさいー」

雪はすぐさま俺の所にやって来た。

「寝てていいのに…」と言った俺の言葉に対し

「眠くないー」と反論してきた雪の目は昨日よりも更にしょぼしょぼとしていた。眠気を払うように目をゴシゴシと擦ると、俺へ少しの抜けた笑顔を向けた。

「ご飯出来てますから食べましょー」

「おう。」

俺が手を洗ったりして、テーブルの前に座った時、テーブルの上には今日の夕食のクリームパスタに野菜のスープが置かれていた。

「うまそうだな。」

「ふっふーん。」

雪は俺に褒められて鼻高々といった様子だった。

「じゃあ、いただきます。」

「いっただきまーす。」

俺はまず、パスタを口に運んだ。

「ど…どうですか？」

雪は自分では食わずに俺が食べている所を緊張した面持ちでじっと見つめていた。

「うん、すげー美味しい。」

クリームソースはとてもコクがあって、ソースだけでも美味しく食べられそうな味付けだった。

「良かったー」

雪はホッと一息付くと言葉を続けた。

「スープはどうですか？」

雪の言われるままに俺は今度はスープにスプーンを伸ばした。

「こっちもすげー美味しいよ。」

「よ、良かったー」

雪は再び一息付くと、やっと緊張が解けたのか見る間に笑顔に変わっていった。雪はそのまま自分もパスタを一口食べた。おいしい、と自分で呟いた後、俺の目を見ると笑顔で話し掛けてきた。

「これ昨日の残りなんですよー」

「え？」

俺はいまいち雪が言った事が理解できなかった。

「雪：意味が分からないんだが…」

「んーだからですねーこのスパゲティのソースは昨日のシチューをベースに使って、スープはシチューに入ってた野菜を使ってるんですよ。」

「まじ？」

俺は目の前に並ぶ料理を確認した。

もう一度パスタを口に運ぶ。確かにシチューに近い味がしない訳ではない。

「まじですよーでも美味しくできて良かったです。」

雪はエッヘンと胸を張った。

「ん、うまい。」俺がそう言って、どんどん食べていく様を雪は自分もゆっくり食べながらも笑顔で眺めていた。

「なあ、雪…」

「はい。」

食器を洗い終えた雪がやって来た。

「今日の朝はごめんな…」

「えっ？…あついや…私が悪いんで…」

「少し…前の話聞いてくれるか？…」

俺は雪の言葉を遮って呟いた。

「はい。」

俺は雪のその言葉を聞くと、ゆっくり息を吸い込み、そして、そのまま語り始めた。

「あのエプロンは、俺の恋人だった人の物でな…」

雪は静かに俺を見つめていた。

「俺と幼なじみの人でな、まあ俺の五個上だったんだ。昔からいつもいっつも姉みたいに俺の面倒を見てくれてたんだ。いつからかな…」

いつの間にか俺はその人の事好きになってたんだ。

高校ん時、もう抑えきれなくなって、彼女にやけくそで告白したんだよ…そしたらさ、向こうも俺の事が好きでいてくれてさ…

それからどんくらいかな…とりあえず最初の方はもうただ本当に嬉しいんだよ。何もかもを許せるって感じだな。

けどさ…彼女が隣にいる事をしっかり理解出来るようになってくると、今度は自分自身の現実とか二人の未来や周りばかり見えてきて、気になり始めちゃってさ…

もう今の自分自身が分からなくなったりしたりしてさ…」

俺は一息付いた。

「今お茶を持ってきます。」

雪がすっと立ち上がり、台所から俺と自分の前に運んで来た。一口すすると、俺は再び話し始めた。

「意外にも五歳って年の差はかなりでかくて、俺が大学生になった時にはもう就職して二年目なんだぜ？

どんなに届こうって頑張ったって届かないんだよな…

彼女に合うような男になろうって、ただひたすらにがむしやりに頑張ったよ…

で、何かを終えて、改めて自分の立ち位置と彼女の位置を見ると、彼女はいつの間にかもっともっと先にいるんだよ。それも立ち止まって俺を見つめていてくれるんだ。

勿論、実際の彼女はそんな事はしていなくて、多分ずっと俺の隣にいてくれてたんだと思う。

結局、どんなに頑張っても俺はガキのまんまでさ…

最終的にはその不安からのイライラが彼女に向いちゃってな…それで俺が勝手に別れたんだよ。それから自己嫌悪の繰り返し。

俺、弱いんだ。この家、同居してて、彼女との色々な思い出があったさ。

やっと慣れてきたんだけど思い違いかもしれないし、雪にとっては傍迷惑なだけだろうが、時々、雪の動作とその彼女が重なって見え

るんだ：

それで雪に八つ当たりだもんな：

変わってないよ、俺。

後悔して、凹んで、自分自身を罵ったあの日から：

あの時から何も変わってないよ：

俺は再びお茶に手を伸ばした。先程まで温かったお茶はいつの間にかぬるくなっていた。

「変わってますよ。」

「え？」

俺は口元まで運んだ手を止めた。

「私はずっと見てきた訳じゃないけど多分変わって、優しくなって、強くなって、温かくなって、かっこよくなってますよ。」

「何で：何でそんな事が：」

「だって：今、私がそう思ってますもん。」

それじゃダメですか？、と雪は微笑んでくれた。

「あ：あ、りがと：う。」

その後、俺は少しギクシャクとしてしまっていたが、それでも雪は今まで通りに振る舞ってくれた。

電灯を消し、互いの場所に横になった。

「明日も家にいないんですか？」

部屋の暗闇に雪の声が響いた。

「悪いな：明日もなんだ。」

俺は布団の中でゴソゴソと雪の方に向き直って答えた。

「そうですか：」

「どうした？」

「いえ、何でもないです。おやすみなさい。」

「おう、おやすみ。」

釈然としない物が俺の胸に残り、なかなか眠くならなかったが、ベッドから雪の寝息が聞こえ始めるといつの間にか眠りについていた。

第五話―雪明かり―

―冬は嫌いだ―

嫌な記憶があるから：

自分の弱さで彼女と離れてしまった。ただ、自分を見つめられなかったから、彼女を見てるつもりで彼女の姿を見ていなかった。

―冬は嫌いだ―

自分自身の弱さを思い出し、自分自身の幼さを痛感するから：

彼女の笑顔はいつも俺に向けてくれた。彼女の優しさはいつも俺を支えてくれた。ただ、それらが全て俺自身を年下と見てたと思っていた。彼女は俺に対して下に見る事なんかしていなかった。

俺が弱さで自分自身を保てなくて、幼さでそれを正面から受け止める事が出来なかった。

―冬は嫌いだ―

―あら、何で？―

―んー何でだろ…まあ寒いし、虚しさを感じるからかな…―

―そっか…でも…私は好きだな―

―どんなところが？―

―寒さの中にも人の温かさを感じるからよ―

―人の温かさか…―

―もう一つ理由あるのよ―

―ふーん―

―ちよっとー何でとか聞かないの？―

―じゃあ…何で？―

―ふふ…それはあなたの名前と同じ季節だからよ―

俺は先程自動販売機で買った缶コーヒ―をゴミ箱に入れ、公園の中心にある時計に目をやった。時計の針は両方とも六を少し過ぎたくらいだった。

「そろそろ戻るかな…」

俺はよっころしょ、と立ち上がると家へと帰って行った。

「うーさみ…やっぱり朝は特にさみーな。」

俺が家の中に入ると雪が頬を膨らませ、立っていた。

雪さん…目がかなり怒ってます…

「た…だいま。」

「お帰りなさい。」

俺が靴を脱いでいると上から雪が言葉を投げてきた。

「どこに行ってたんですか？」

「いや…早く目が覚めたから、ちよつと散歩に…」

「とりあえず朝ご飯出来てますよ。」

雪は俺が靴を脱ぎ終えたのを見計らい、朝食にしてくれた。

「あ…りがとう。」

朝食今日はパンにサラダ、ベーコンエッグ、そしてコーンポタージュと言う比較的シンプルな物だった。

「いただきます。」

「何で黙って行っただんですか？」

「だって…雪、寝てたし…」

その言葉の後二人の間に沈黙が流れた。

（空気が重い…俺そこまで怒られる事したかな…）

正直、朝食の味が分からない。味云々の前に今、自分の口の中にあるのは食べ物か疑う程、場の空気は重くなっていた。

「ずるいですよー」

唐突に発せられた雪の言葉は予想をかなり上回る物だった。

「は？」

「だって一人で散歩とかずるいじゃないですか。私を連れて行ってくれたっていいのに置いてけぼりにしたんじゃないですか。だからずるいですよー」

俺は雪の言葉を聞いてクスリと笑ってしまった。

「そこ何笑ってんですかー」と言いながら雪はビシッと俺に指を向けてきた。

「いや、怒ってた理由が単純だったから…」

「私には重要なんですよー」

「ごめん、ごめん。今度は一緒に行こう。良ければ今日の夜だっていいぞ。だから機嫌直してくれよ。な？」

「仕方ないですねー許してあげますよ。その代わり今日の夜散歩ですよー」

「はいはい。分かったよ。今日俺が帰ってきたらな。」

「はーい。」

元気に返事をした雪を見ながら俺は残りをかき込み箸を置いた。

「じゃあ行ってくるな。」

「行ってるっしょーいー」

街中で鈴の音が鳴り響いていた。

柔らかく、優しく、切なく…

「今日はイヴか…」

俺はいつの間にか昔いつも待ち合わせしていた時計台の下に立っていた。

ーこれからクリスマスはここに待ってるわー

「俺が消したつもりの記憶も残ってるのか…」

俺は一人呟き、その場を後にした。

俺が家に着くと、雪の目はこの時間には珍しく爛々と輝いていた。

「おっかえりなさあーい。」

「ただいま…」

「ご飯でーきてますよー」

「お、おう。」

雪の元気な姿に苦笑いしつつ俺は鞆を起き、テーブルの前に腰を下ろした。

「今日はご馳走ですよー」

雪はそう言うのと調子外れな鼻歌を歌いながら晩御飯を運んできた。確かに今日の晩御飯はとても豪勢な物だった。

七面鳥とまではいかないが鶏のもの、ローストした物、小さなピザ、スライスされたガーリックトースト、上に少し焦がしたチーズが乗っているオニオンスープ、コーンサラダだった。

「す…すごいな…」

「一日中これ料理してましたもんっ」

「お疲れ…」

苦笑いしながらも俺はとても感心していた。

「さあー食べましょー」

雪は両手にナイフとフォークを持ち、食べる気が満々と言った様子だった。

「じゃあ…」

いただきます、と二人の声はほぼ同時だった。ローストチキンを一口大に切り、口に運んだ。

「うまい！！雪、すげーうまいよ。」

「良かったですー」と言っ、雪もチキンを一口食べた。ゆっくり咀嚼してから、飲み込み、目をまん丸にして俺に呟いた。

「すごく美味しく出来たみたいです…」

「何で雪自身も驚いてんだよ。」

「だから私もここまでうまくいくとは…」

俺はスープにも手を伸ばした。

オニオンスープのチーズは上はパリパリしているものの、下はとろりと溶けていた。ピザはトマトソースにチーズ、バジルという比較的シンプルな物ではあったが、それでも雪の味付けは絶妙だった。

「このガーリックトーストも手作りなんですよー」

「え？買って来たんじゃないの？」

俺は食べかけの手を止め、尋ねた。

「にんにくと鷹の爪をオリーブオイルで軽く炒めて、それをフランプパンに少しかけて、パセリをパラパラっとすれば完成ですー」

「すごい…な…」

俺はただただ感心しているだけだった。

「雪、料理人なれんぞ。」

「えっへん！」

料理は多く見たものの、食べてみると味付けが美味しいのもあって、実際はあっという間になくなってしまっ、テーブルの上には綺麗な皿が残っているだけだった。

「コーヒーか紅茶どっちがいいですか？」

雪がそう言いながら皿を片付け始めたので俺はそれを制止し、答えた。

「いいよ。そんなら俺がやってやるよ。」

俺は雪から皿を受け取り、流しに置いて水につけた。そして、雪の方を振り返って尋ねた。

「で、雪は何飲むんだ？」

「一緒のでもいいですー」

「分かった。」

俺が珈琲をいれるため、やかんに水をいれ、火にかけている間に雪は冷蔵庫から何かを取り出してテーブルに戻って行った。

テーブルの方からは雪が歌詞の分からない所は鼻歌で誤魔化しながら歌っているジングルベルが聞こえてきた。

やかんが鳴り始めたのでインスタントコーヒーを用意しておいたカップの中に注いだ。

「出来たぞ。」

俺がテーブルに運んだ時、何を取り出したのか理解した。

そこには二つのショートケーキが用意されていた。

「買っちゃいましたー」

「まあ、イヴだしな：ほら。」

俺が雪の前に珈琲を置くとほぼ同時に雪は俺の前にショートケーキを一つ置いた。

「んーおいしいー」

雪はケーキを一口食べ、幼い子供のようにキャツキャツと喜んでいった。

俺はふと疑問が浮かんだ。

「雪：食費いくらかけた？：」

雪は人差し指を口元に持っていていき、少し考えてから答えた。

「大丈夫ですよーちゃんと計算して、安売りの店の特売品選んで、商店街では値切りもちよつとしましたし、後は今まで余ってたお金をちよつとだけ使いましたけど：ダメでした？」

口元に少しケーキのクリームが付き、そして上目遣いでダメでした？何て聞かれて

「はい、ダメ」と答えられる男もそうそういないと思う。

「ま、まあ：足りたんなら別に大丈夫。」

「良かったですー」と言って、またケーキを美味しそうに食べ始めた。俺はフツと微笑み、自分のショートケーキにちよこんと乗っていた真っ赤な苺を掴むと、雪のケーキの上に乗つけた。

「えっ？」

「やるよ。」

「ありがとうございますー」

雪は満面の笑みで俺があげた苺を口にいれた。

「おーし、次は散歩行きますよー」

雪は俺が珈琲を飲み終わると、すぐに運んで、洗い物を始めた。俺はさっきまで着ていた上着を羽織り、雪の白いコートに白いマフラーを片手に持って、出発する用意は出来ていた。

「洗い物終わりましたー」

「ほら、準備は出来たぞ。」

俺が雪にコートとマフラーを渡そうとすると、雪はぷーっと頬を膨らませた。

「女の子には準備があるんですー待ってて下さいよーあつ後視かないで下さいよー」

雪はニコツと笑ってそう言うとは着替えに向かった。

「覗かねーよ！」

俺は深い溜め息をつくとき、何気なしに台所の流しに目をやった。雪が来て、まだ数日しかたっていないというのに、今まで少し乱雑になっていた流しは綺麗になり、その他の物も整理整頓されていた。そして、端っこには小さなコップに植えられた植物が置いてあった。

どの位待っただろうか、雪はやつと用意が出来たらしい。

玄関でブーツを履いている雪を見て俺は息を呑んだ。

（おいおい：変わりすぎだろ…）

「コートとマフラー下さいー」

「お、おう。」

俺の手からコートとマフラーを受け取った人物は本当に雪なのかと見間違え程だった。雪は今までが”可愛い少女”だったとすると、今は”美人な女性”と表現した方が正しい。

「行かないんですかー？」

この間の抜けた喋り方も今までだったら、雰囲気と結構合っていたが、今の雪ではギャップを感じられた。

「あー行くよ。」

そして、そのギャップは俺に再び彼女を思い起こさせた。別に雪と似ている訳ではない。しかし、大人びた格好なのだが、どこか幼稚さを残した話し方、考え方。そうかと思うと俺の考えが及ばない程の事を考えている。

俺はそんな彼女が常に俺の前にいるように感じていた。

どんなに歩いて、走っても追いつかない距離……

必死になるのに縮まらない距離……

しかし……そんな距離なんか無かったと気付いたのは……

「大丈夫ですかー？」

俺の思考は雪の言葉によって止められた。俺はゆっくりと辺りを見回した。いつの間にか家を出て、公園へと向かっていたらしい。

「悪い、大丈夫だ。」

「なら良かったですー」

雪は俺のその言葉を聞くと、俺に合わせたゆっくりのスピードでスキップをし出した。いや、先程からしていたのかもしれない。

「あっ……ちょっと待て。」

「はいー」

雪がスツと立ち止まり俺を振り向いた。俺はすぐそばの自動販売機で温かい缶コーヒーを二本買うと、雪に一本渡した。

「あったかーい。ありがとうございますー」

「どう致しまして。」

「あつ公園着きましたよー」そう言いながら雪はちょこんと俺の隣にやって来た。

カシュッ

俺は缶コーヒーを開けた。隣では雪がなかなか開けられずにいた。

「ほら。」

俺は蓋を開けた缶コーヒーを雪に渡し、雪の手に握られていた缶コーヒーを手にした。

「ありがとうございますー」

「どう致しまして……」

俺達はいつの間にか最初に出会った場所まで来ていた

「雪、ここ覚えてっか？」

「ここ、何かあったんですかー？」

「覚えてないならいいよ。」

ベンチの近くを通り過ぎようとした時、雪が呟いた。

「ベンチ座りませんか？」

雪は俺を見つめていた。俺は無言でベンチへと歩き出し、すぐに腰を下ろした。雪もすぐにベンチに座った。

雪は特に何を話す訳ではなく缶コーヒーをじっと見つめていた。

「あのですね…」

「ん？」

雪が突然口を開いた。雪はまだ神妙な顔付きで缶コーヒーを見つめていた。

「短い間でしたが今までありがとうございました。」

雪が発した言葉は俺の思考をストップさせた。

「私の翼見ましたよね？」

俺は雪を始めて見た時の事を思い出した。そして、雪の翼の事も…

「ああ…」

「あんまびっくりしてないですね…」

「びっくりしてんに決まってるだろ…ただ、反応がうまく出来ないだけだ。」

「そうですか…そりゃ驚きますわよねー

えと、話続けますけど、私は雪その物なんです。」

「ごめん、理解できるように話して…」

「前、雪は神様の翼と言っていましたよね。それとほぼ同じと思っ
てくれれば良いですよ。」

「あーえーじゃあ雪は神様って事…か？」

（あーあー意味が全く分らない…）

「一概にはいとは言えませんが、似たような感じですよー」

正直、意味が本当に分からない。

混乱している俺に対して雪はさらに言葉を続けた。

「でも…それでも…一緒にいた5日間はとても楽しかったです。」

「俺もそりゃ何だかんだ言って楽しかった…よ。」

「私、迷惑ばっか掛けてた訳ではなかったんですね」

「今、一番迷惑掛けてんぞ。」

もうこの際、雪が何なのかは関係ない気がしてきた。

ただ：雪の口から聞きたくなかったただかもしれないのだが：

俺は冷え切った缶コーヒを飲み干し、立ち上がった。

後ろから雪が

「ぶー」と言って、俺の背中をポコポコと叩いてきた。

「ほら行くぞ。」俺は雪に向かって手を差し出した。

とりあえず今はもう雪が言っていた意味の分からない事は考えるのをやめた。

「はい。」

雪は俺の手を掴み、立ち上がった。

ガチャツ

俺の手がドアノブを回した。

今まで外にいたので、俺の手の方がドアノブより冷たく感じた。

「ただいまー」

俺の後ろからさっきまで意味の分からない話をしてきた”馬鹿”な

美人な女性が能天気な声を上げた。

俺が特に反応もせず靴を脱いでいると、後ろからトントンと雪が叩いてきた。

「ん？」

靴を脱ぎ終え、雪の方を振り向くと、雪はその場でニコニコと笑みを浮かべながら立ち止まっていた。

「どうした？」

「ただいまー」

俺はやっと雪の意図していた事が理解できた。

「雪、お帰り。」

「えへへー」

雪は照れながらそう笑うとやっとブーツを脱ぎ始めた。

「雪、今日はまだ風呂入ってないだろ？先入れよ。」

「悪いですよー」

「遠慮せずにさっさと入って来いって。だいたい寒かったんだから、風邪ひく前に温まって来いよ。」

「そこまで言うなら…」と言って、脱衣所へと向かった。

「またバスタオルで出て来る気かー？」

俺の言葉を聞き、雪は顔を真っ赤にして戻ってきた。

「えっちーばかー私にはそ、そんな気はないですよー」

「分かったからさっさと入って来い。」

俺がそう言うのと雪はまだ赤く染まっている頬を膨らませながら、服を抱えトテトテと小走りで再び脱衣所へと向かって行った。

俺は台所へと向かい、雪のためにココアを作り始めた。

手鍋に牛乳を入れ、火にかける。

少し沸騰してきたらココアパウダーと砂糖を少しずつ入れていき、溶かしてゆく。そして、良くかき混ぜて、完成だ。

「よし出来た。」

コップに入れ、テーブルに置く。

（雪が上がって来るまで待ってるか…）

俺は床に横になった。すると、さっきまではあんなにはっきりしていた意識が徐々に薄れていった。

「起きて下さいー」

そんな声が聞こえたかと思うと、俺の上に何かが乗ってきた。

「ぐはっ!!」

飛び起きると上になっていたのが雪だと分かった。

「雪…何やってんだ…」

「起こしてたんですー」

「人を起こす時お前は思いっ切り飛び乗るのか?…」

俺がそう言うのと雪はスーッと目線を逸らした。

「いや…まあ…えへへー」

「いーからどけっ」

「はーいー」

上に乗っていた雪をどかせて、まだ濡れた雪の髪をクシャツと撫で、俺は立ち上がった。

「そのココア飲んでいいぞ。」

「やったー」

雪は万歳してから、コップに手を伸ばした。

「あっ…でも冷めたかもな…今温め直してくるよ」

俺はそう言くと、雪の手からコップを受け取ろうとした。しかし、雪はそのコップを俺に渡そうとはしなかった。

「冷めてるだろ？貸せよ。」

「大丈夫です…とつてもとつてもあったかいです…」

雪は一口飲んだ。

俺は雪の言葉に口を噤んでしまった。

「お風呂入ってきて下さいー」

少し潤んだ瞳が俺を見つめていた。

いつものように熱めのシャワーを頭から浴びる。

冬の寒さで冷え切っていた俺の全身がだんだんと温かくなってきた。シーンとした風呂場の中、俺は雪の潤んだ瞳の理由を理解する事は出来なかった。

風呂から上がってきた時は確か潤んでいなかったはずだ。しかし、どんなに考えても俺に解答が出てくる事はなかった。

俺が風呂から上がり、歯を磨いてから脱衣所を出ると雪はちよこんとベッドの上に座っていた。

「もう寝れんのか？」

「はーい。」

雪と目が合った。しかし、雪の瞳はもう潤んでいなかった。

俺は電気を消し、布団に横になった。

「雪、おやすみ」

「おやすみなさーい。」

冷え切った冬の夜、カーテンから漏れる月明かりのみの暗闇の中、俺の背中に誰かが触れた。

「……一緒に……寝ていいですか？」

「ああ……」

俺の背中には雪の温もりが確かに伝わっていた。俺の前にある雪の手は崩れそうな程細かった。

「今まで……本当にありがとうございました……」

俺の首もとを何か冷たい物が流れ落ちた。

「本当に……本当にありがとうございます……」

俺は必死に振り向こうとするものの、体の自由は全く聞かず、何か言葉を発しようとしても口が動かず、ただ眠りの中に落ちないようになっているだけで精一杯だった。しかし、俺の耳にはしっかりと言葉が届き、俺の頭の中で大きく、深く響いていた。

「さよなら……冬馬さん……」

俺の頬を何か冷たい物が流れ落ちた

俺の頬に誰かの唇が触れた

俺の意識は深く深く落ちていった

第六話―深雪―

―深雪―

雪の美称。

深く積もった雪。深雪。

目が覚めた。

カーテンを開けると外は白銀の世界になっていた。

すぐに付けたテレビのニュースでは数年ぶりの大雪と告げていた。

そして、数年ぶりのホワイトクリスマスだと：

「雪か…」

そう発して俺は深く考えた。

雪…

今、窓の外で降っているもの…

違う…

「何だ…」

深く考えるものの、ぽっかりと穴が開いてしまったかのように思い出す事が出来ない。

台所に向かうとそこには朝食が置いてあった。

誰が準備したかなんて分からない。しかし、思い出す事の出来ない”あの少女”が作っておいた物という事は理解できた。

台所の片隅には小さな植物が置かれていた。

俺は朝食をテーブルに運ぶと、一人で食べ始めた。なぜか一人の食事はとても久しぶりのもので、寂しさまでも感じてしまった。

「ごちそうさまでした。」

そして、俺は知らず知らずのうちに呟いていた。

「美味しかったぞ。」

俺は立ち上がり、後片付けを終えると着替え始めた。その時、棚に

ある写真立てが目に入った。その写真立ての中では二人が俺に笑みを向けていた。俺は倒そうと手を伸ばした。しかし、伸ばしかけた手を途中で止めた。その手に触れたのは白い一枚の羽根だった。

「あれ…何で羽根が…？」

その羽根は俺を不思議と温かい気持ちにさせてくれた。

「…え!？」

何故か俺の頬は濡れていた。

俺の目から溢れ出した物は頬を流れ、顎の先から滴り落ちていった。

「何でだ……」

俺の呟きは窓の外の白い雪の世界にへと消えていった。

「動かなきゃ……」

俺は目を軽く擦ると、顔を洗いに向かった。

顔を洗った後、鏡の向こうでは俺が俺自身を見つめていた。

俺はそのまま身支度を整えた。

いつものジャケットを羽織り、畳まれて置いてあった白いマフラーを首に巻いた。

引き出しの中にしまわれていた腕時計を取り出した。

あの時から止まっていた俺の中の時は動き始めたのか…

いや、まだ動いていない。この腕時計を俺の手首に巻いたからといって、動き始める事はないだろう。

俺は昔の俺から少しも成長してないんだから…

—変わってますよ—

—私はずっと見てきた訳じゃないけど多分変わって、優しくなって、強くなって、温かくなって、かっこよくなってますよ—

—だって…今、私がそう思ってますもん—

—それじゃダメですか?—

「そうだったな…少しは変わってるかな…今の俺なら彼女に会えるかな…」

窓の外の君に尋ねてみたが言葉は帰って来なかった。

そんな時、俺はマフラーの下に置かれていた手紙を見つけた。

震える手で便箋を開いた。

便箋の中からは一枚の手紙が出てきた。

こんにちは

何か手紙ってちょっと照れくさいです……

もうあなたは私の事を覚えていないかもしれませんが、あなたは私に色々な思い出を残してくれました

私はあなたには私といった記憶も残せません

だから、このマフラーと私の一部……神様の翼の一部を残しておきます

あなたはあなたが後悔してる程、冷たい人間ではないですよ

あなたの優しさ、温もりは今でも私の中でずっと、ずっと残っていてくれます

もう後悔しないで下さい

もう迷わないで下さい

もう悩まないで下さい

あなたは彼女にとって今も大切な人のはずです
しっかりと隣にいてあげて下さい

短い間でしたが、本当にありがとうございます

12/25 Merry Christmas……

あなたと彼女が幸せになりますように……

神様の翼より

俺はすぐに家を飛び出した。

震える程寒かった。もう冬の夜が訪れていた。まだ雪は降っていた。寒くないと言ったら嘘になる。けれども、優しく誰かが俺を包み込んでくれているような物があった。

俺は約束の場所にたどり着いた。

周りは煌びやかな電飾、愉快なクリスマスソングが流れ、たくさんの恋人達が幸せな一時を過ごしてあた。

「はあ：はあ：」

荒い呼吸を整えながら周りを見回す。しかし、俺は視界に彼女の姿を捉える事は出来なかった。

（やっぱり：いる訳ないよな：）

溜め息を一つついた時、後ろから声がした。

俺は急いで振り向いた。しかし、そこに彼女の姿は無く、別の待ち合わせをしていた一組の恋人達が巡りあえたらようだった。

「くそっ：」

自分自身が悪い事くらいは分かっている。こんな約束だって破られて当然って事も分かっている。

彼女は来る訳がないんだ：

白い雪が舞う中

約束の時計台の下に一人

満月が一つの影を照らし出す

「はあ：来る訳ないよな：

結局、俺が悪い訳だし、あの約束だってなきっと覚えてないだろうし：」

俺は腕時計を見た。時計の針は両方共12の数字の近くだった。体はとうの昔に冷え切っていた。肩の部分には雪が少し積もりかけていた。

夜になり、雪は更に激しさを増していた。

(もう帰ろうか…)

一瞬そんな考えも浮かぶ。しかし、俺は動かなかった。贖罪のつもりかもしれない、独りよがりな考えかもしれない。けど、それでも俺はここで彼女を待つしかなかった。

せめて、今日という日の間は…

街は電飾も少しずつ消え、静まり返り、恋人達も少しずつ減っていく。

「くそっ…あの時…もう少し俺が大人だったら…もう少し俺が成長していたら…もう少し…もう少し…」

今まで降り注いでいた雪が急に止んだ。

いや、正確には俺の周りだけ止んだ。

俺の頭上には赤い傘があった。

彼女がいつも使用していた傘…

大切な人のお気に入り傘…

昔、俺が彼女にあげた傘…

「間に合ったー…はあ…はあ…まだ12時過ぎてないからまだクリスマスよね？だからセーフで大丈夫よね？」

ごめんなさい…遅くなってごめんなさい…

でも傘も差さないでこんな雪の中にいたら風邪ひいちゃうわよ？」

俺は振り返る。そこには昔から見ていた笑顔、大好きだった笑顔、優しさが満ち溢れていた笑顔があった。

「さ…桜…？」

「あら？ 恋人の顔も忘れちゃったの？」

彼女が少し怒ったように頬を膨らます。俺の頭の中で思考が止まった音がした。

「恋人…？ お、俺…が？」

「こないだの事は許してあげる。」

「こないだ？」

「私、ちよっと時間が止まってたみたい。やっと動き出したのよ。あなたもそうでしょ？」

彼女がウィンクをする。俺の思考回路はまだしつかりと作動しない。

「え？ あ？ う…うん…」

「今度はもう離さないでね。」

彼女が俺に手を差しのぼす。

「俺…俺ずっと後悔してた…」

まだガキだけど、まだ大人に多分なれてないけど…それでも、もう迷わないよ…

桜をずっと、ずっと見続ける。」

彼女は笑顔でこう答えた。

「ありがとう…冬馬…」

第六話―深雪―（後書き）

『神様の翼が舞う日』をここまで読んでいただきありがとうございます

これが最終話です

とりあえず一言言わせて下さい：

終わったー

いや、本当に長かったです

正直、二回程間に合わない事覚悟しました

正直、何回も諦めかけました

それでも、それでも何とか終わらせる事が出来ました

色々な小説を書いていますが、よくよく考えると最終話は初めてです（放棄したのではなく、まだ執筆中ですよー

本当に今、感無量です

今回は色々な事に挑戦してみました

今まで以上に”日本語”について考えましたし、前書きと後書きを抜いたのもそうですし、もちろん小説の内容も考えました（その結果が主人公の名前が最後の最後まで出てこないこと主人公の彼女の名前が出てこないことです

本当にここまで読んでいただきありがとうございます

本当はもっともお話したいのですが12／26になってしまいそうなのでここで終わらせる事とします

本当にありがとうございます

最後に：

2	M
0	e
0	r
7.	r
1	y
2.	C
1	h
5	r
2	i
3	s
..	t
5	m
9	a
	s

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2708d/>

神様の翼が舞う日

2010年12月25日14時25分発行